

会 議 要 旨

会議の名称	第2回川越市観光振興計画審議会
開催日時	令和4年1月25日（火） 午後2時 開会 ・ 午後4時 閉会
開催場所	川越市役所4階 4A会議室
会長氏名	立教大学名誉教授 溝尾 良隆
出席者（委員）氏名 （人数）	別紙委員名簿のとおり
欠席者（委員）氏名 （人数）	別紙委員名簿のとおり
事務局職員 職 氏 名	栗生田部長、飯野副部長、田中課長、阿部副課長、猪鼻(哲) 副主幹、徳田主査、小渕主事
会議次第	1 開会 2 あいさつ 3 会議及び会議録の公開 4 議事 第二次川越市観光振興計画改訂版（案）について 7 その他 8 閉会
配布資料	次第、審議会名簿 第二次川越市観光振興計画改訂版（案）

議 事 の 経 過	
発 言 者	議題・発言内容・決定事項
	議題 第二次川越市観光振興計画改訂版（案）について
事務局	<資料を基に説明>
委員	施策３３「より深く川越まつりを知ってもらうための PR」の文中において、「川越まつりの<u>見せ方</u>や楽しみ方を提供」とあるが、「川越まつりの<u>見方</u>や楽しみ方を提供」ではないか。
事務局	「見方」に修正する。
会長	山車が中央通り沿いに並ぶ際に、山車や囃子の説明など解説を行ったらどうか。
委員	解説は必要と考える。また、人形や山車の構造の話のほか、川越まつりの歴史なども含めて、市民、さらには観光客に伝えていく場を設けることが大切である。
委員	川越まつりの説明を市民が観光客に説明してあげるとよい。また、市民講座などで川越まつりに係る知識を育むことが重要である。
委員	川越まつりの知識が深い人は多く、さまざまな場所で市民が学べる場を設けている。ただ、観光客が学べる場を設けることはなかなか難しいため、例えば山車を持っている町内の人々が、その場で山車の説明や、囃子を演奏するなどできるとよい。
委員	１ページ「計画改訂の目的」の中で、「オーバーツーリズム」という言葉が出てこないが、１３ページ（６）「観光客増加」の中では、「オーバーツーリズム」という言葉が出てくる。１ページでは意識的に抜いたのか。
事務局	１３ページでは、国全体における見方として、「オーバーツーリズム」と記載しており、川越については、マイナスの表現となる「オーバーツーリズム」という言葉は控え、「観光客増加」と表現している。

委員	施策13「若者を呼び込むための仕掛けづくり」について、現在来ている観光客は若い人が中心のように見えるため、他の層としたらどうか。若者を呼び込むとしても、文化度の高い層を呼び込んだらどうか。 14ページのマーケティング調査の結果について、潜在能力のあるコンテンツではなく、むしろ第三象限にある旧山崎家別邸、市立博物館、市立美術館、ヤオコー美術館といったところに関心を持ってきてくれる人を増やしたらどうか。博物館や美術館などは作っただけでは入館者数が順次減少していくため、リニューアルすることが大事である。データは掲載するだけでなく、分析することが大切である。
事務局	若者をターゲットとしたことについては、現計画を策定した当時は若者の観光客が少なかったこと、また、川越市の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において「縁結び川越」が施策として挙げたことが理由である。 観光施設については、市の歳入のためにも、入館者数増加を図る必要があると考えている。
会長	蔵造り資料館は工事に入っているのか。
事務局	詳細は把握していないが、完成までまだ数年掛かると聞いている。
委員	食べ歩きやインスタ映えを求めて来訪する若者が多いが、川越の本物を見せる取組みを行ったらどうか。博物館において、別途料金制で通常公開していない場所や物を見せるなど。施策31「日本文化を生かしたおもてなしの充実」は外国人向けだが、本物の魅力は外国人だけでなく、日本人の大人にも通用するのではないか。
委員	ICTについて、改訂版の中では主に情報発信する手段として記載されているが、非接触のキャッシュレス決済システムについても広めていく内容としてほしい。また、ICTで観光客の移動情報が取れば、アンケート調査も必要ないのではないか。
委員	日付の表示形式について、元号だけだと元号改正されたときに分かりにくい。西暦と併記しているものもあるので、すべて西暦との併記に統一したらどうか。

委員	18ページの「特に克服すべき弱み」のところで、「外国人観光客に対する受入環境整備の不足」について、多言語化なども大切であるが、サステナブルツーリズムという視点も入れたらどうか。国のガイドラインを取り入れ、エコツーリズムやグリーンツーリズムなどを包含したサステナブルツーリズムの取組みを行い、海外の認証を取りますといったアピールが、観光客を呼び込む姿勢として必要ではないか。
委員	川越まつりは当日だけでなく、準備期間も本物として見せる価値がある。準備期間に行っている情報等を発信し、市民や観光客に公開してはどうか。最初はお金を掛けずに行い、効果があるようであれば、博物館や美術館と共同で企画するなど、段階を踏むとよい。
委員	18ページ「SWOT分析」の中で、「東京から30分の立地特性」が強みとあるが、本当に強みなのか。以前、安島委員の講演で、交通利便性が高いと観光地として衰退するといった話があった。交通利便性が高い観光地は、ディズニーリゾートのように常に新しい魅力を持ち続ける必要がある。 さらに、安島委員の話の中で、東京スカイツリーができたにもかかわらず、東京タワーの人气が落ちない理由は、東京タワーの古典化が起きたからだという話があった。川越の古典化のためには、川越に関わる映像コンテンツや文学を推し進めた方がよいのか。
委員	川越は蔵造りの町並みが駅から約2キロ離れている点で、観光客が飽きるのを防いでいるのではないか。ただし、博物館などは飽きられてしまっているので、新しい価値の創造をしていく必要がある。まちが飽きられるのを防ぐ方法として、文学や歌、絵に描かれることが大切で、川越も古典化してきていると考えられる。 今あるコンテンツに頼って裾野を広げても限界があるため、新しいコンテンツを追加し、さらに裾野を広げていく政策が必要である。
委員	同じくSWOT分析の「脅威」に「近隣自治体による地域特性を活用した多様な観光政策」とあるが、むしろ近隣自治体が盛り上がることにより、川越の文化的価値がより際立つのではないか。

委員	近隣自治体の多様な観光政策については、あまり脅威に感じられない。何もないところには新しい物を創るしかないが、創り続けないとすぐ飽きられてしまう。その点、川越は恵まれている。
会長	川越は、川越藩や比企郡の範囲で見ると、様々な魅力があり、近隣自治体の多様な観光政策は脅威と捉えるのではなく、活かすべきである。 ただ、「東京から30分の立地特性」については、強みである。以前、文化庁が重要伝統的建造物群保存地区を始めた際、川越は文化庁のある東京から近いという点で、第1号としての選定を考えていた。関係者が反対したため登録が遅くなってしまったが、30分という立地特性があったからこそ候補に挙がったと考えている。この強みをどう活かすかが大事である。
委員	本計画で課題となっている施策や評価が悪い施策について、DMOや観光協会とも連携して、コンテスト形式で市民や学生に考えてもらってはどうか。
委員	本計画について、分析はすでに終わっているのだから、具体的な実行部隊について考える必要がある。 宿泊観光客の少なさについては、川越に宿泊してもらって渋沢栄一に行くのか、鎌倉殿に行くのかといったプランを考えればよい。弱みを克服して、強みはさらに強めていくようなプランを、コンテストなどで応募し、観光事業者を含めた全員で共有していくべきである。
会長	具体的な事業は施策の中にあるのか。
事務局	施策には関係各課が実施している事業が紐づいているが、新しい事業も進めていかなければならないと考えている。
委員	実際に計画を実行する際、毎年新しいことが起きて対応するケースがあると思うが、どこが対応するかを決めておいた方がよい。 例えば、渋沢栄一の名前は時の鐘の鐘の部分に、支援者の筆頭として名前が書かれている。また、松江町にある教会の煉瓦は、渋沢栄一の作った日本煉瓦で焼かれたものである。これらの情報発信はすぐに取り組んでいかないと、機を逃してしまう。

委員	点を線で結びつけるという意味で、歩かせるために道路をカラーリングして、ここは渋沢栄一が歩いた道かもしれないと思わせるのはどうか。もしくは、古い地図を頼りに、城下町の道をカラーリングし、復元はできなくても面影が見えるようにしてはどうか。
委員	当時の場所に絵があるだけでもよいので、少しずつ城下町の姿を復元していくことは大事である。
委員	小江戸川越みどころ90コースの中に、そういったストーリー性のあるコースを作ったらどうか。回遊性の向上にもつながる。
事務局	関係各課と調整しながら、同じ方向を向いて事業を実施していけるよう、一歩ずつ進めていきたい。
委員	今回は中間見直しのため、大掛かりな変更はできないと思うが、先ほどのサステイナブルツーリズムなど、新しく出てきた言葉については、どこかに掲載した方がよいのではないかな。 また、事業の実行部隊については、行政だけでなく、できるところが担っていく姿勢も大事であると思う。
委員	改訂版に記載できないとしても、実際に実行する際に、課を越えてオール川越で観光事業を行っていくことが必要であることを議事録に残し、市職員が見ることで次のアクションに繋がってほしい。
会長	行政は縦割りにならず、もっと横断的に事業を行っていくべきである。
事務局	市としても、サステイナブルな考えを持って、歳入の確保をしていかないと観光行政も持続可能でなくなってしまうため、お金を落としてもらう、その対価としてしっかりとしたサービスを提供する形で整備を進めていきたい。
委員	渋沢栄一など、人物に着目するとストーリーが繋がりやすい。他にも、松平信綱や小林斗盒がいる。
会長	小林斗盒については、中国では神様のような存在であるにもかかわらず、川越の市民は知らない人が多い。もっと知ってもらう

	取り組みが必要である。
委員	玉川上水と川越藩、松平信綱の関係などを紹介するツアーなどを行ったらどうか。既に行っているのであれば、情報発信が弱い。
委員	施策23でレインボー協議会が挙げられているが、歴史的経緯や地域の特色として共通のものがある旧川越藩をいれるべきではないか。地産地消という観点からも、現在の行政区の中だけではなかなか難しいため、旧川越藩内で考えたらどうか。
会長	施策8、施策20のグリーンツーリズム、エコツーリズムについて、ターゲットを明確にした方がよい。観光客はなかなか難しいため、市民や近隣市町村の住民をターゲットにしたらどうか。郊外の魅力をもっと市民に知ってもらいたい。
会長	施策6「コンベンション誘致の推進」について、今後進めていくべきと考える。コンベンションを推進することで、川越を知ってもらいよい機会になる。さらに、コンベンションと宿泊客数の割合も統計データとして取るべきである。
委員	コンベンション誘致は市の広報室とDMOが担当している。ただ、具体的な取り組みまで至っていない。
委員	コンベンションは観光の要素も強いので、観光課も一緒に取り組んだ方がよい。
委員	観光協会事務所の立地がよくない。欧米では最も人が集まる場所に観光協会を置いている。
委員	観光協会やDMO川越など、観光に携わる組織が多い。これらを一つにすることは難しいかもしれないが、パートナーシップを深めていく必要がある。極論だが、観光課の職員が4、5人減って、その分の人件費が事業費として団体に支出されることが理想である。ただ、すぐには難しいため、そういった方向に関係者全員が向かっていく意識を持つことが大切である。
委員	何をするにも財源が必要であるが、39ページの「財源」に観光税の話がない。民間が主導で観光事業を行っていくのであれば、観光税を本格的に考えなければならない。

事務局	組織の改善は難しい課題だが、少しずつ進めていきたい。 観光協会事務所については、財源の観点から現在の場所（松江町2丁目）に仮に置いている。事務局としても、観光協会は観光客の目につく場所にあるべきと考えている。
委員	しばらくコロナは収束しないと思われるため、イベントではなく市民への啓蒙活動を強化したらどうか。財源の確保が厳しいという状況や、現在の観光事業者の実態について情報を発信していけば、市民の協力を得やすいのではないかな。
事務局	観光協会やDMOとは毎月会議を重ねているため、それぞれの在り方についても議論を重ね、情報共有しながら改善していきたい。 以上